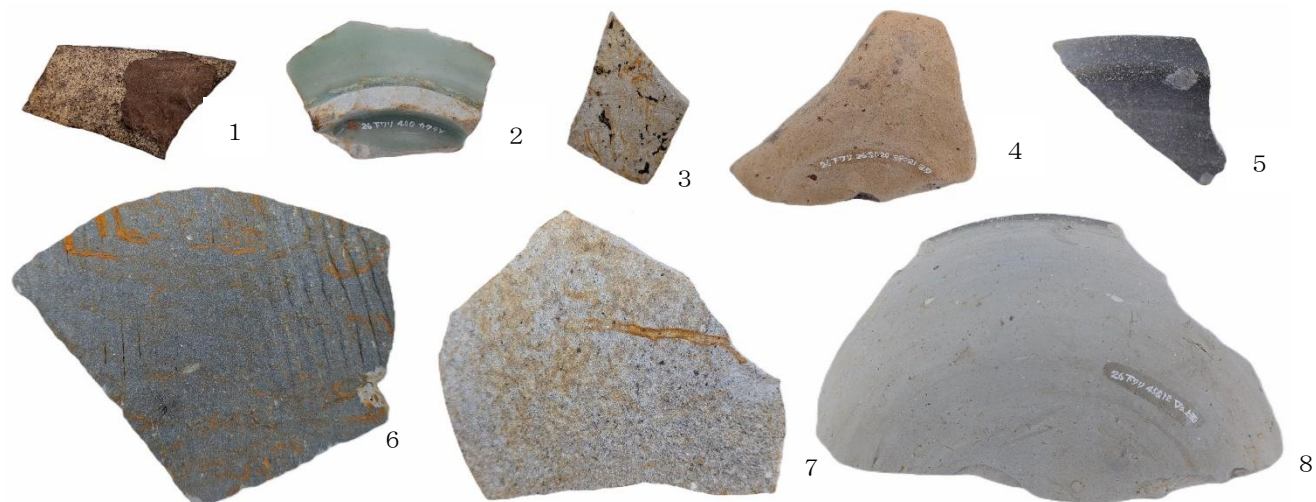


5 出土遺物

鎌倉時代の龍泉窯系の青磁碗や平安時代の土師器碗、須恵器、灰釉陶器などが出土しました。遺物の多くは、中世の水田と平安時代の上面から出しています



1. 越前焼（近世） 2. 龍泉窯系青磁碗（鎌倉時代） 3. 灰釉陶器 4. 土師器無台碗 5. 須恵器瓶 6. 須恵器甕
7. 須恵器杯蓋 8. 須恵器無台杯（3～8 平安時代）

下割遺跡の出土遺物（縮尺 1/2）

6 飛鳥時代の調査

第12次調査区の南西側に位置している、令和4年度（2022年）の第10次調査では、飛鳥時代の平地建物や祭祀遺構が見つっています。平地建物は、小型と大型のものがあ、いずれも建物の周りに溝が巡ります。遺物は高杯、長胴甕、壺、支脚などがみつっています。祭祀遺構は、当時の地表面上に須恵器高杯、黒色土器高杯、手捏ね土器、土師器鉢などの土器が置かれた状態で出土しました。土師器鉢には滑石製の白玉が伴っていました。

今回の調査区でも、飛鳥時代の遺構・遺物が見つかる可能性があり、現在調査を進めています。



第10次調査 祭祀遺構（SX8503）（西から）



第10次調査 平地建物（SX8502）（南東から）

まとめ

今年度の調査では、中世の水田跡が確認でき、過去の調査で確認されていた水田跡が当地にも続いていることが明らかとなりました。また平安時代の調査では、遺構・遺物が少ないことから、当地が集落の縁辺部であることが分かりました。引き続き調査を進め遺跡の内容を明らかにしていきます。



No

上越市下割遺跡第12次調査現地説明会資料

令和8年9月19日（土）

公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所

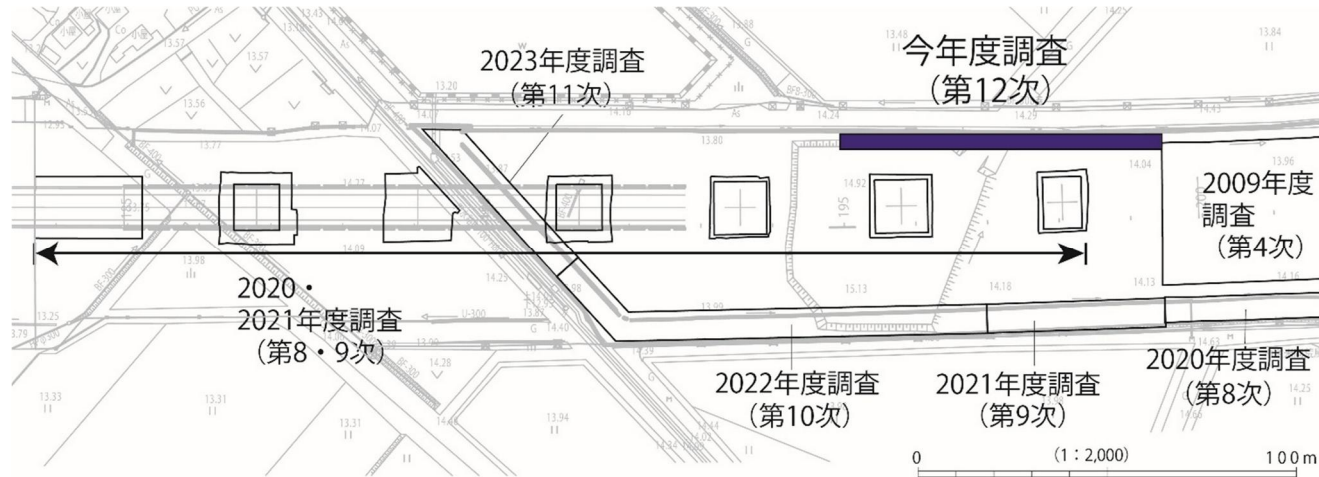
1 遺跡の概要

下割遺跡は、国道253号上越三和道路の建設事業に伴い、発掘調査を実施しています。遺跡は、高田平野の東側、飯田川によって形成された標高約14mの自然堤防上に立地しています。

下割遺跡の発掘調査は、平成14年（2002年）から始まり、今回が第12次調査になります。

これまでの調査では、縄文時代後期（約4,000年前）の建物や古墳時代前期（4世紀）の集落、飛鳥時代（7世紀前半）の平地建物や祭祀跡、平安時代（9世紀）の集落や畠跡、鎌倉時代から室町時代（13世紀前半～16世紀）の水田跡を確認しています。

令和8年度は、同じ調査区を上から時代順に4面に分けて、順次掘り下げて調査を行っています。調査面積は、それぞれ約300㎡で、計1287㎡に及びます。時代は、それぞれ中世1面（1面目）、平安時代2面（2・3面）、飛鳥時代1面（4面目）になります。中世の1面目では水田に伴う畦畔と溝、平安時代の2面目では過去の調査区から続く溝、平安時代の3面目ではピット列がそれぞれ見つかりました。4面目は現在調査中です。



下割遺跡の発掘調査位置図



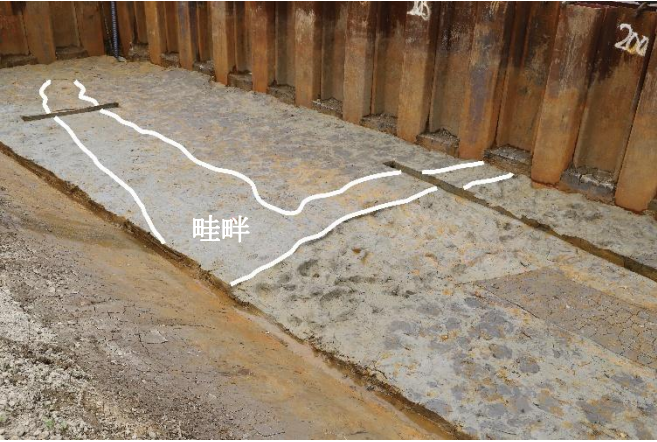
調査区全景（上空南西から）

2 中世の調査（1 面目）

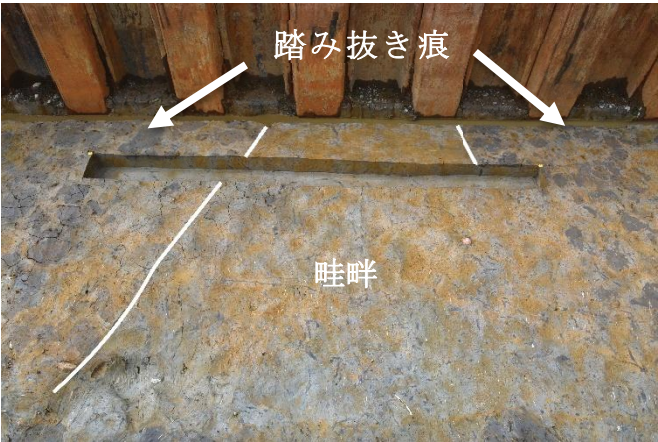
調査区全域から、中世の水田跡が見つかりました。水田を区画する畦畔の痕跡や、軟弱な水田土壌に人の足が深く沈み込んでできた「踏み抜き痕」（写真中の不整形な灰色の点）がありました。

今回検出された畦畔は、「疑似畦畔」と呼ばれるものです。畦畔の盛り土部分は後世の耕作によって削平されていますが、畦畔の下は帯状の高まりとして残っています。また、踏み抜き痕も畦畔が存在した位置では途切れており、かつての水田の区画を知る手がかりとなります。

水田跡は、遺物の出土が少なく、詳しい年代を特定することが困難ですが、過去の調査から鎌倉時代から室町時代の水田跡と考えられます。畦畔の作り替えも認められることから、一定期間にわたり水田として利用されていたことがうかがえます。また、調査区の土層を観察すると、中世の水田面の上に近世の水田面が重なっていました。この場所では、中世以降に水田として土地利用され、近年まで水田が営まれていたことが分かります。



疑似畦畔の検出状況 (26 畦畔 9・10、26SD8)（南東から）



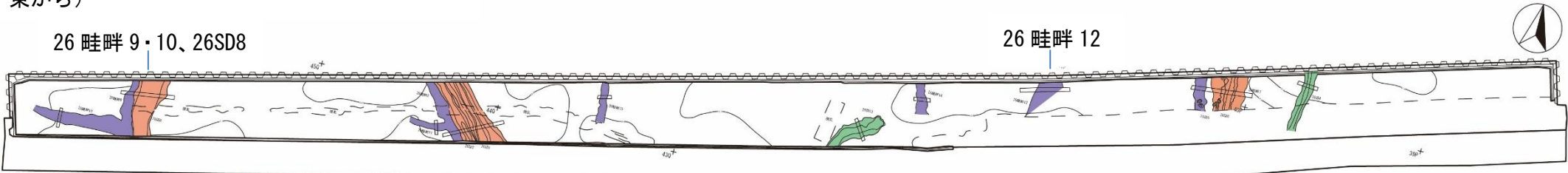
疑似畦畔と踏み抜き痕（26 畦畔 12）（南から）



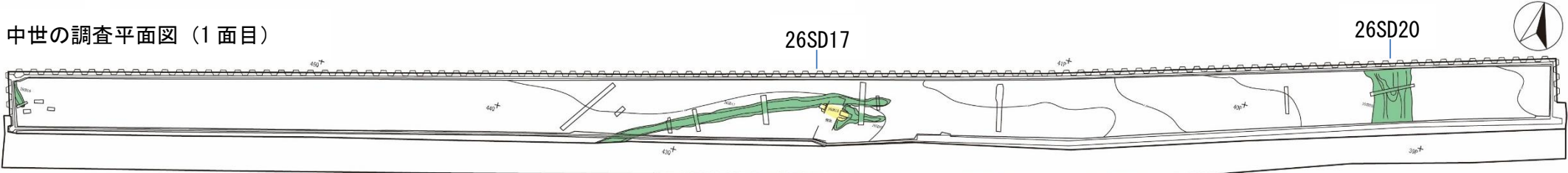
溝の完掘状況（26SD17）（南西から）



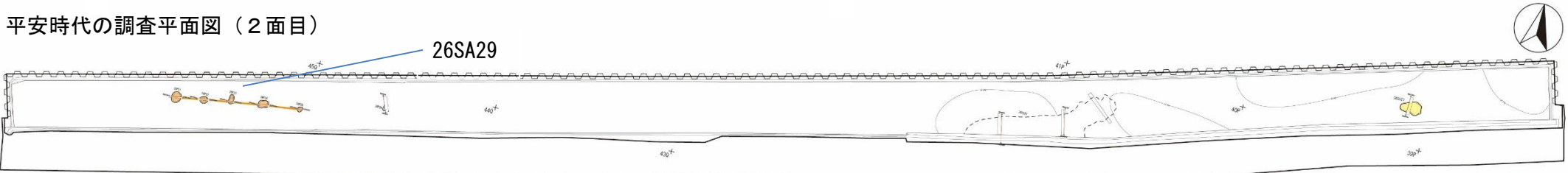
溝の完掘状況（26SD20）（南東から）



中世の調査平面図（1 面目）



平安時代の調査平面図（2 面目）



平安時代の調査平面図（3 面目）

■ 畦畔 ■ 畦畔に伴う溝 ■ 溝 ■ 土坑 ■ ピット列

下割遺跡平面図（縮尺 1:600）

3 平安時代の調査（2 面目）

第4・8次調査で確認されている水路と考えられる幅広の溝の続き（26SD20）が見つかりました。過去の調査では、遺物が多量に出土しましたが、今回の調査では遺物があまり出土していません。第4次調査では、この幅広の溝の東側で建物跡が複数見つかったことから、そこが当時の集落の中心であり、今回の調査区は、集落の中心から、外れたところに位置していると考えられます。そのため、遺物の出土も少ないと考えられます。過去の調査では、8世紀前半～9世紀中頃の遺物が見つかったことから、同時期に使われていた溝と考えられます。

調査区の中央部付近では、溝（26SD17）が見つかりました。直線状に細長く伸びる溝で、途中で途切れることや、水が流れた痕跡がないことから水路ではなく、また溝が複数ではなく1条しかないことから畠作溝とは考え難く、土地や施設を区画する溝であると考えられます。

4 平安時代の調査（3 面目）

3 面目の調査では、調査区の西側で、5 基で構成されるピット列を確認しました。いずれのピットも形状が安定せず、何の用途に使用されたか明確には不明です。杭列の可能性もありますが、何らかの構造物の一部である可能性もあります。遺物は包含層から土師器片が少量出土しました。



ピット列の完掘状況（26SA28）（南東から）